

ふるさとを愛された先生

香川 保

その日、昭和五十五年六月十二日早朝、私は、衝撃的な電話を受けた。「総理が亡くなりました」。担当記者の声である。地方局でありながら、大平総理誕生以来、官邸に記者を常駐させ、特別に大平総理の動向に注目し、そのつど郷土向けの番組を制作してきたのだ。党総裁就任、首班指名、大平内閣発足時には、定時番組を変更して、延べ五時間以上にわたって特別番組を編成した。その後も、日常の活動ぶりを「東京発」ニュースとして、また、外遊すれば必ず記者を同行させ、郷土宰相の活躍ぶりを特別レポートとして放送してきたのだ。

それなのに、政権担当以来わずか一年余り、健康には自信があるといっていたあの大平総理が、こともあろうに病気で亡くなるとは……。前日には出身地の豊浜町で、地元の人たちが八幡神社にお百度参りをして病氣回復の祈願をしたばかりだというのに。学生時代からお世話になった私には、あまりにも悲しいニュースであった。

私が初めて大平先生にお目にかかったのは、昭和二十八年の春であった。二度目の選挙で当選された直後、駒込林町のお宅を訪ねた時だ。「君は大学を出て何になるんだ」「ハイ、新聞記者か政治家になりたいです」「政治家とは、どうしてだ」「ハイ、演説が好きだからです」「演説が好きか、演説するということは勉強しないといけないぞ！ 私は得意じゃないが……」。もちろん、私は選挙権がなかった時だから、先生の演説を聞いたことはなく、上手かどうか知らなかった。当時、東京は田舎から上京した学生にとって、下宿をさがすのが大変だった。そこで先生は、川越街道の近くの練馬区に家を借りて、郷里から出てきた学生たちの寮を開設された。私も卒業

するまで、ここでお世話になった。この寮では、常時二十名近い学生がいた。時どき、先生はご家族づれで立ち寄られた。そんな時には、寮ではきまってバラずしを作って会食したものだ。「大平総理の、サヌキうどんとバラずし」は、総理に就任後、有名になったが、そのころからバラずしには文字通り目がなかった。

寮にこられた時の先生は、きまって私たちに講義された。「これからの日本は、経済の安定をはかり、社会生活を向上させ、国際情勢に立ちおくれないうにしなければならぬ。そのために君たちは……」というような内容であったと思う。ときには、一時間以上に及ぶこともあった。その時の先生の話は、青雲の志をいやく若者にとって、たしかに説得力があり迫力があり、感銘を受けたものだった。総理就任後、マスコミがつけた「アーウー」はまったくなく、非常に雄弁家であったと、私は記憶している。

その後、私は郷里の放送局に勤めるようになったが、先生が官房長官、外務大臣と要職につかれ、帰郷するたびに観音寺の事務所へうかがって、インタビューなどをさせてもらった。どつかと坐った先生は、私が初めてお会いした時の印象といつも同じだった。

「しみじみと、ふるさとの温かき、ありがたさを味わっている」、五十四年七月、総理就任後、初めてお国入りした時の第一声である。そして、出身地の豊浜町では、満場の町民を前に「私が総理になるとはどなたも考えなかつたでしょう。皆さんが思われなかつたのは当然で、私自身がなれるとは思っていなかったのだから」と、どつとわかせた。しかし、二十年前、大平代議士は、観音寺の事務所で地元記者団と会見した時、「私はいま総裁学を勉強している」と述べている。あれから二十年、大平総理の誕生はなるべくしてなつたのである。国を思い、ふるさとサヌキを愛した信念の人、あまりにも早く旅立たれてしまった。思っただに残念である。謹んでご冥福をお祈りします。

(西日本放送報道制作局次長)